

## 〈ブルカニロ博士の実験〉考

—「僕の先生が云ったよ」の位相をめぐって—

構 大樹

### 一、ジョバンニの精神的成長物語としての

#### 〔初期形三〕

これまでもたびたび議論されてきたことであるが、『新』校本宮沢賢治全集』に収録された「〔銀河鉄道の夜〕初期形三」と「銀河鉄道の夜」(以下「後期形」と表記する)を比較したとき、二つの間にはジョバンニが体験する「不完全な幻想第四次の銀河鉄道」の旅の枠組に決定的な差異が生じている。それは「初期形三」で登場していたブルカニロ博士が、「後期形」では削除されたことに起因する。すなわち「初期形三」では、ブルカニロ博士が「幻想第四次」の世界から現実世界へ帰ってきたジョバンニに向かい、次のように語りかけるのである。

ありがたう。私は大へんいゝ実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたいとさつき考へてゐた。(一)

この言葉からわかるように、「初期形三」は「銀河鉄道の旅が『ブルカニロという博士の心理実験にあやつられてジョバンニの見た夢』という仕掛け」(二)のもとに成立している。一方、ブルカニロ博士のいない「後期形」では、「銀河鉄道の旅は、まったくジョバンニ自身の夢」(三)となつている。当然、この枠組の差異は、物語の解釈にも影響を与えている。

〔初期形三〕も〔後期形〕も、共に物語の軸として、ジョバンニの精神的成長の過程が描かれていることは間違いないだろう。精神分析的観点から、ジョバンニの成長を考察した内田寛は、その過程を次のように述べている。

銀河鉄道の旅の意味を要約して述べるならば、ジョバンニの〈新しい自我〉が〈幼児的自我〉を駆逐し、取って代わる過程であったといえる。銀河鉄道の旅はこの目的を遂行するための意図的な夢であったのである。そのような意図の主体は第三次稿においてはブルカニロ博士であった。そして第四次稿においてその主体はジョバンニ自身を措いて他にはない。第四次稿とは少年が自力で成長していく物語なのである。(4)

内田のいう「新しい自我」とは「現実認識的な自我であり、自分が世界の中心にいるわけではないという現実、周囲の人間は自分とは違った様々な考えを持っているという相対性を認識しようとするもの」であり、「幼児的自我」とは「親から受けた無条件の愛によって形成された自我。自分が世界の中心にいるという感覚をもってい

る」ものを指す。ここで着目したいのは、「初期形三」と「後期形」では成長を促す主体が異なっている、とする内田の指摘だ。そうするとブルカニロ博士とは、「実験」によってジョバンニを成長へと導く者、と位置づけることができるであろう。先行研究からも同様の趣旨の指摘は提示されている。例えば蒲生芳郎は、ブルカニロ博士を「ジョバンニの魂の導き手、人生に向けて促し励ます者」(5)として捉えているし、西田良子は「少年に勇気を与え、まっすぐに進む道を教示する人物、すなわち助言者もしくは伝道者的人物」(6)として位置付けている。ブルカニロ博士は「実験」を用いて、自分の「考」をジョバンニに伝えた。その「考」こそ、ジョバンニを精神的に成長させようと志向するものであったはずだ。ジョバンニが体験した「幻想第四次」の世界は、まさにその「考」を遂行するために作り出された世界といえるだろう。試みに、ブルカニロ博士の「考」に則して「幻想第四次」の世界を再構築してみると、次のようになる。ブルカニロ博士はジョバンニを銀河鉄道に乗せ、精神的成長を促そうとした。その結果、ジョバンニは「幻想第四次」の世界で大学生、鳥取り、「黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年」(以下、黒い洋服の青年、と表記する)らに出会い、そして別れを経験させられることで、一つの「決心」をすることになる。ジョバンニの「決心」、そ

れは「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸いのためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。」というものであった（この箇所は「銀河鉄道の夜」テキスト群を通して、手が加えられていないことも合わせて確認しておく）。しかしその「決心」は、「僕たち一緒に進んで行かう」とカムパネラに呼びかけていることからわかるように、カムパネラと共にいるということが前提となっていた。そのため、カムパネラを消滅させ、「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」（以下、黒い帽子の大人、と表記する）が「みんながカムパネラだ」と説くことで、カンパネラへの執心を解き放つ。そしてなおかつ、ジョバンニの「決心」を現実のものにするための手掛かりを与えた。この一連の体験が、ブルカニロ博士の「考」をジョバンニに定着させるために施した「実験」の枠組みである。

かくしてブルカニロ博士の「実験」は終了し、ジョバンニは現実世界へと戻された。その際に、ブルカニロ博士はジョバンニの「決心」が現実世界においても持続するように、彼をこう諭している。

さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本統の世界の火やばげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。

天の川のかな（か）でたった一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくしていけない。（7）

この言葉は「幻想第四次」の世界の体験と、現実世界をつなぐ橋渡しの意味がある。ブルカニロ博士の「実験」にとつて、「切符」とはジョバンニの「決心」を証明する役割を担っているのである。それゆえ、ここで「切符」を強調するのであり、別れる間際にも「これはさっきの切符です」と、博士は現実世界でもジョバンニに「切符」を手渡すのだ。この行為からは、ジョバンニを成長させよう、現実世界での生き方を変革させようとするブルカニロ博士の強い意志をみることができる。以上のようにして、ブルカニロ博士はジョバンニの成長を図ったのである。

しかし、ジョバンニはブルカニロ博士に「実験」を施されるより前に、博士以外の何者かから、博士の「考」に類似する教えを受けていた可能性がある。それは「初期形三」のテキストに示唆されている。「サウザンクロス」で下車しようとする黒い洋服の青年に対して、それを引き留めたい一心でジョバンニが彼らに語りかける場面である。

「僕たちと一緒に乗って行かう。僕たちどこまでだっ

て行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちももうこゝで降りなけあけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしきうに云ひました。

「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ほくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさえなけあけないうつて僕の先生が云つたよ。」(8)

ただし、この「僕の先生が云つたよ」の箇所は注意が必要である。「初期形三」のテキストはこの箇所以外に「僕の先生」を示しておらず、物語におけるその位相を明らかにすることは容易ではない。それでもなお、「僕の先生が云つた」こと、「天上」を指すことよりも今いる場所を「天上」を超えるようにしなければならぬという思想には、ブルカニロ博士がいう、「みんなのほんたうの幸福」を「本統の世界の火やはげしい波の中」で探求せよという「考」に近いものがあることは着目すべきである。

仮に、ブルカニロ博士の「考」と同様のことをジョバンニは「実験」以前に教えられていたとすると、博士の「実験」の必要性にも疑問が生じてくる。本稿は「僕の先生が云つたよ」の箇所に着目し、両者の思想の類似性を指摘することで、ブルカニロ博士の「実験」が行われた意味を問うてみたいのである。

## 二、「僕の先生が云つたよ」の位相

「僕の先生が云つたよ」というジョバンニの言葉に注目した論として、吉江久弥による次の言及がある。

生のままでそれ（僕の先生が云つた）こと―引用者）が口からただけに「先生の言葉」の重要性は一層確認されることになる。そして、胸の奥に本人が思いもしないのに今の今まで潜んでいたその言葉が、はっきりとした意義のつかめないままに極めて大切なものであることが、少年には無意識裡に感じ取られていたものであったことがわかる。その言葉が正に時期を得て噴出したということになる。(9)

吉江の論は、「後期形」の分析を中心としている。しかし「初期形三」から「後期形」にかけて、「僕の先生が云つたよ」の箇所には手が加えられていない。このことから、「初期形三」においても同様のことが言えるであろう。ブルカニロ博士は、ジョバンニに黒い洋服の青年らと（ほんとうの神さま）論争をさせることで、ジョバンニの胸の奥に秘められた「僕の先生が云つた」ことを噴出させた、と。

しかしながら、この「僕の先生が云つたよ」の箇所に、まだまだ謎が多い。そもそも「僕の先生」とは誰な

のか。吉江は「ブルカニロ博士」と「僕の先生」とは明白にかき分けられて」と述べている。それは「初期形三」のテキストがブルカニロ博士を指すとき、「博士」と表現しているためだ(10)。他にも、管見の限りでは(ブルカニロ博士)説(11)、(法華経の教え)説(12)、(国柱会関係者)説(13)が提示されている。このように解釈に幅が出てしまうのは、先にも述べたように、「僕の先生」が示されるのがこの箇所のみであるからだ。そのため「僕の先生」が誰を指すのかという問いに対して、明確な答えを提出することができないのである。しかし「初期形一」「二」では、この箇所が次のようになっていたことは注目すべきであろう。

もつといふとこへ行く切符を僕ら持つてるんだ。天  
上なら行きつきりでないって誰か云ったよ。(14)

「誰か」から「僕の先生」への改稿によって、ジョバンニが聞いたという「誰か」が「云った」ことは、より具体性を増していることがわかる。さらに「僕の」という表現には、ジョバンニの親近感さえもうかがわせる。やはり「初期形三」では、ジョバンニは「僕の先生」から教えを受けていたのではないだろうか。それはすなわち、テキストには「僕の先生」の正体が示されていたという

ことになるだろう。だとすれば、「僕の先生」は破棄された原稿、特に「(以下原稿五枚なし)」に示されていた可能性が高い。ここには、ブルカニロ博士が「なにか話かけながら、ジョバンニを次第次第に夢の中へ誘った」様子が示されていたとされている(15)。

「あゝあの白いそらの帯が牛乳の川だ(以下原稿五枚なし)」

ら、やっぱりその青い星を見つめてみました。

ところがいくら見てゐても、そこは博士の云ったやうな、がらんとした冷たいとこだとは思はれませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のやうに考へられて仕方なかったのです。(16)

波線部の「そこ」は「青い星」を指している。このことは、先の「なにか」の中において、「青い星」に関することが話されたことを示唆している。そのとき、ブルカニロ博士が「僕の先生」について語ったのかもしれないし、ブルカニロ博士が現われる以前に、「僕の先生」に直接出会っていたとも考えられる。ただし破棄された原稿は、黒い洋服の青年らに出会った後の箇所にもある。テ

クストの「(以下原稿一枚?なし)」がそうだ。しかし、ここに「僕の先生」が示されていたのであれば、「僕」という表現が気になる。「幻想第四次」の世界で「僕の先生」に出会っていたとすると、カムパネラも一緒にいたことになり、「僕らの先生」といってもいいはずだ。このことから、ジョバンニは現実世界で(直接、間接は不明だが)「僕の先生」に教えを受けていた、と推測することができるのである。

現実世界でジョバンニが教えを受けていたのならば、「僕の先生」が言った「こゝ」とは現実世界を指していることになる。しかしジョバンニの言う「こゝ」とは、ジョバンニが今いる場所、つまり「幻想第四次」の世界のことを指しているようだ。この食い違いは、ジョバンニの「幻想第四次」の世界認識から生じていると考えることができる。ジョバンニは「幻想第四次」の世界を、現実と区別していたとは言い難い。むしろ「幻想第四次」の世界／現実世界を意識しないで「こゝ」という表現を使っているのではないか。というのも、「僕の先生が云ったよ」と語った時点のジョバンニには、その意識が極めて曖昧であるようだからだ。それはジョバンニが「幻想第四次」の世界に導かれた直後の場面に示されている。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た」ジョバンニは呟きました。「けれども僕は、ずうっと前から、こゝでねむってゐたのではなかったらうか。ぼくは決して、こんな野原を歩いて来たのではない。途中のことを考え出さうとしても、なんにもないんだから。」(17)

ジョバンニは「幻想第四次」の世界にいつの間にか放り込まれた。ジョバンニはそのことに混乱し、ついには「幻想第四次」の世界こそ現実世界ではなかったかと思ひ始めた様子が、ここでは示されている。そしてこの混乱は、カムパネラの出現によって収まる。これ以後、ジョバンニが「幻想第四次」の世界／現実世界に疑問を差し挟むことはなくなった。ここから、ジョバンニが「幻想第四次」の世界に同化していく過程をみることはできないだろうか。ジョバンニのいう「こゝ」とは、ジョバンニの認識上では現実世界を指しているのである。

吉江が述べるように、「僕の先生が云った」ことが「正に時期を得て噴出した」のならば、ジョバンニは黒い洋服の青年らと別れるに際して、「僕の先生が云った」ことをようやく理解したと考えられる。それは「こゝ」が「天上」の対立項として、正しく用いられていることからわかるであらう。かゝる子は「こゝ」が「天上へ行くところ、つまり、「天上」へ至るまでの途上と考えている。それは「天上」

こそが唯一の目指すべき目標であると「神さまが仰つしやつ」だから、という理由に基づいている。かゝる子にとつて、「神さまが仰つしやつ」することは絶対なのである。当然、かゝる子の家庭教師である黒い洋服の青年も、同様に考えている。「僕の先生が云つたよ」に続く（ほんとうの神さま論争）には、彼らの信仰する「神さま」の絶対性が如実に示されている。

「あなたの神さまってどんな神さま□ですか。」青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません。けれどもそんなんでなしにほんたうの神さま一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろなたった一人です。」「あゝ、そんなんでなしにたつたひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」

「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくししたちとお会いになることを祈ります。」(18)

しかしジョバンニにとつて、黒い洋服の青年らの「神さま」が言つたことは、自分の幸せと合致しない。ジョバンニの幸せとは、この時点では、彼らと銀河鉄道の旅を続けることにあるのだ。だからこそ、ジョバンニはかゝる子のいう「神さま」を「そんな神さまうその神さまだ。」と否

定するのである。黒い洋服の青年らを引き留めるためには、「天上」へ行く必要がないことを主張しなくてはいけなかつた。そこで気付いたのが「僕の先生が云つた」ことだったのである。「僕の先生」が説いた、今「こゝ」に在る場所をよりよい世界にせよ、という考え方。ジョバンニはこの考えを黒い洋服の青年らに伝えようとした。しかし結局のところ、それは失敗に終わる。なぜならば、彼らはその盲目的な信仰ゆゑに、「天上」に対して下位の場所である

「こゝ」が「天上」に並ぶこと、ましてや「天上」を超越する可能性を秘めていることに考えが及ばないからだ。

この場面の後、黒い帽子の大人が（ほんとうの神さま論争）を総括するかのごとく、次のように述べていることに注目したい。

みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだというふだらう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことも涙がこぼれるだらう。それからぼくたちの心がいゝとかわるいとか議論するだらう。そして勝負がつかないだらう。けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も科学と同じやうになる。(19)

ここでは、盲目的な信仰は否定されている。本当の信仰とは科学と同じように、十分な実験と分析を経た上で獲得されなければいけない、と黒い帽子の大人は述べるのだ。この考えを突き詰め、全ての事象において「少しどうかたと斯う考へだし」ていくと、信仰どころか、何事も信じることができなくなってしまう。ではどうすればいいのか。ブルカニロ博士は「けれどももちろんそのときだけのでもいゝのだ」と断つた上で、「本統の世界の火やはげしい波の中」（＝現実世界）で、ジョバンニの「決心」、「あらゆるひとのいちばんの幸福をさがす」ように求めるのである。「僕の先生が云つた」こと、「こゝで天上よりもつといゝところこさえなけあいけな」もまた、架空の「天上」よりも「こゝ」（＝現実世界）に重きを置いた思想である。ここに、先の「お前はもう夢の鉄道の中でなしに本統の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない」という言説を重ねてみれば、「僕の先生」とブルカニロ博士の思想の類似性を見出すことができるであろう。

ジョバンニは「実験」を施される以前に「僕の先生が云つたこと」に触れていた。そして、ブルカニロ博士はジョバンニがそれを知っていることを承知の上で「実験」を行ったのではなかったか。だとすれば、解決せね

ばならない問題が一つ出てくる。それは、ブルカニロ博士が「実験」を行わなければならなかった理由である。

### 三、口ごもるジョバンニ

ブルカニロ博士の「実験」の必要性を考えるには、ジョバンニが背負っている境遇について触れなければなるまい。なぜならば、ジョバンニが背負う父の不在という要素は、彼の生活に多大な影響を与えていると考えられるからだ。しかし中地文は、その境遇は同時代の「少年小説」の中において「一つの類型に属するものであった」と主張している。それはなぜか。中地はこう続けている。

第三次稿冒頭部に描かれたジョバンニの悲しみの原因は、彼の不幸な境遇そのものにあるといつてよいだろう。その悲しみは、冷たく激しくジョバンニを苛むが、境遇が改善され、生活が楽になつて級友と遊ぶ時間ができれば、解消する類のものとも考えられる。(19)

確かに、ジョバンニの「不幸な境遇」が改善されれば、彼の悲しみは解消されるかもしれない。しかし原因はそればかりではないのではないか。



というのも、ジョバンニは「不幸な境遇」の中にあつて、その余波（貧困、中傷など）に直面するとき、そこから逃げるような行動を取っている。その行動こそが、ジョバンニに悲しみをもたらす原因と考えることができるからである。例えば、ジョバンニがザネリにからかわれる場面をみてみよう。

「ザネリ、どこへ行つたの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこから中きいんと鳴るやうに思いました。(20)

ジョバンニの父は、監獄に収容されたと噂されている。ザネリもそんな噂を聞いてか、ジョバンニをそのことではからかっている。ジョバンニにとって、ザネリの言葉は自分へのからかいだけを意味するものではない。父を中傷する言葉でもある。それであるにもかかわらず、ジョバンニは反論しない。頭の中では「わるいことなど、お父さんが

する筈はないんだ」、父の人間性を保証するものもちゃんとある、と思つていても、ジョバンニは沈黙するのである。そのとき、ジョバンニは次のように考へている。

去年の夏、帰つて来たときだつて、ちよつと見たときはびっくりしたけれども、ほんたうはにこにこわらつて、それにあの荷物を解いたときならどうだ、鮭の皮でこさへた大きな靴だの、となかいの角だの、どんなにぼくは、よろこんではねあがつて叫んだかしのれない。ぼくは学校へ持つて行つてみんなに見せた。先生までめづらしいといつて見たんだ。いまだつてちゃんと標本室にある。それにザネリやなんかあんまりだ。けれどもあんなことをいふのはばかだからだ。(21)

ジョバンニの現状を根本的に改善するためには、中地の指摘するように、父の帰還、そして経済状況の回復が必要となつてくるであろう。しかしその状態から少しでも抜けだそう、境遇の抜本的解決を待たずとも現状を自分の力で変えていこうというジョバンニの意志は、テキストから看取でき

ない。むしろ、肝心なところで口ごもってしまう様子ばかりが描かれている。口ごもるジョバンニの姿、このことは「後期形」と並べてみることで、より明確となる。もう一つ、別の場面から例をあげてみよう。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかったの、貰ひにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命勢よく云ひました。

「ちゝ、今日はもうありませんよ。あしたにして下さい。」

下女は着物のふちで赤い眼の下のところを擦りながら、しげしげジョバンニを見て云ひました。

「おつかさんが病氣なんですすがないでせうか。」

「ありませんよ。お氣の毒ですけれど。」

「そうですね、ではありがたう。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ましたけれども、なぜか涙がいっぱいに湧きました。(22)

「後期形」の同様の箇所ではどうか。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかったの、貰ひにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命勢よく云ひました。

「いま誰もゐないでよくわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジョバンニを見おろして云ひました。

「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少ししてから来てください。」

「そうですね。ではありがたう。」ジョバンニはお辞儀をして台所から出ました。(23)

どちらも共に、ジョバンニは牛乳を取りに来るのを「あしたにして下さい」と伝えられる。しかし「後期形」では「今晚でないと困るんです」と口にするので、結果として牛乳を入手する可能性が芽生えている。先のザネリのからかいに関しても、後期形のジョバンニは「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返し」ている。このジョバンニの行動の差異から、「初期形三」では彼の口ごもる姿が強調されていることを確認できるだろう。ジョバンニは現在の「不幸な境遇」

の中で、今の生活をもっとよいものにしようとはしない。ただひたすら、自分の境遇を嘆くのみだ。そしてその行動は、「幻想第四次」の世界であつても変わらない。

「もしカムパネルラが、ぼくといつしよに来てくれたら、そして二人で、野原やさまざまの家をスケッチしながら、どこまでもどこまでも行くのなら、どんなにいいだらう」というジョバンニの願いは、「幻想第四次」の世界で実現した。しかしジョバンニの望んだ「二人で」旅することは、黒い服の青年達が銀河鉄道に乗り込んでくることで、危うい状況に陥る。ジョバンニ達と同年代と思われるかをる子が、カムパネルラと頻りに話をするからだ。

ジョバンニは俄かに何とも云へずかなしい気がして思はず「カムパネルラ、こゝからはねおりて遊んで行かうよ。」とこわい顔をして云はうとしたくらゐでした。

（カムパネルラ、僕もう行っちまふぞ。僕なんか鯨だつて見たことないや。）  
ジョバンニはまるでたまらないほどいらしながらそれでも堅く唇を噛んでこらえて窓の外を見てゐ

ました。(24)

ジョバンニは二人の会話に入ることでもできたはずである。しかし、ジョバンニは二人の会話を遮ること、つまりカムパネルラとの閉鎖的な関係を取り戻すことばかりを考えている。ついには「あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といつしよに行くひとはないだらうか。カムパネルラだつてあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。」と考えるにいたつてしまう。

ジョバンニは現実世界でも「幻想第四次」の世界でも、口ごもっているようにみえる。だが、あることを契機にジョバンニは口ごもるのをやめ、自分の考えを表わす。それが先の「ほんとうの神さま論争」であつた。ジョバンニは「僕の先生が云つた」ことに気が付くと同時に、口ごもることをやめているのである。この気付き、そしてそれを引き出した「ほんとうの神さま論争」が、「幻想第四次」の世界における体験の中でも、特に重要なものであつたことが、このことから確認できるであろう。

#### 四、「実験」の必要性

現実世界で口ごもるジョバンニの姿は、「幻想第四次」の世界においても「僕の先生が云った」ことを理解する直前までみることが出来る。つまりジョバンニは「僕の先生が云った」ことを聞いただけでは、十分理解することができていなかったことを示している。

ジョバンニは口ごもりながらも、自分の境遇に耐えていた。カムパネルラが自分の友達になってくれる可能性を抱いていたからである。しかしそれは、無残にも打ち砕かれてしまう。「六七人の生徒ら」に「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」とからかわれたとき、カムパネルラがその輪の中にいたからだ。それだけではない、カムパネルラはからかいを止めようとしなければかりか、彼らと一緒に「高く口笛を吹いて行ってしま」う。これを見たジョバンニは、逃げるようにその場から離れ、「天気輪の柱」へ向かっていった。

この場面からは、ジョバンニの危機的状況がうかがえる。カムパネルラという支えを失ったジョバンニが、今まで通り自分の境遇を耐えることはできないであろう。ここに、ブルカニロ博士がジョバンニに「実験」を施した理由がある。ブルカニロ博士には、ジョバンニに「僕の先生が云った」ことを十分に理解させ、実践できるようにさせる必要があった。だからこそ、「さつき考へてあ

た」という「実験」をおこなったのである。

「初期形三」のテクストには父の帰還が示されていない。それはジョバンニの「不幸な境遇」がまだまだ改善されないことを暗示している。ジョバンニが「不幸な境遇」を背負ったまま生きていくためにも、ブルカニロ博士の「実験」は必要だったのである。

#### 【註】

(1) 「銀河鉄道の夜」(「銀河鉄道の夜」初期形三)、「

『新』校本宮沢賢治全集』第十卷童話Ⅲ本文篇所収、筑摩書房、一九九五・九、一七六頁。以下「銀河鉄道の夜」テクスト群の引用は当全集に拠り、『新校本全集』と略記する。

(2) 入沢康夫監修・解説『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』、宮沢賢治記念館、一九九七・三。

(3) (2)と同。

(4) 『銀河鉄道の夜』論―成長物語としての構

造』、『日本文学誌要』第六十三号、二〇〇一・三。

(5) 「二つの「銀河鉄道の夜」―その初期稿と最終稿とをめぐって―」、『宮沢賢治』創刊号、一九八一・一〇。

(6) 「四つの「銀河鉄道の夜」―改稿にみる創作意

- 識の変化」、『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』  
所収、創元社、二〇〇三・四。
- (7) 「初期形三」、一七六頁。  
〔初期形三〕、一七一頁。なお波線部は、引用者による。
- (8) 「求道者ジョパンニの誕生―『銀河鉄道の夜』の主題をめぐって」、『武庫川国文』第四十二号、一九九三・一二。
- (9) 「初期形三」のテキストで「博士」の表現がみられるのは二箇所ある。  
・ところがいくら見てみても、そこは博士の云ったやうな、がらんとした冷たいとこだとは思われませんでした。  
・博士ありがたう、おっかさん。すぐ乳をもって行きますよ。  
一方、「先生」という表現は「僕の先生が云ったよ」の箇所だけである。
- (10) 「初期形三」のテキストで「博士」の表現がみられるのは二箇所ある。  
・ところがいくら見てみても、そこは博士の云ったやうな、がらんとした冷たいとこだとは思われませんでした。  
・博士ありがたう、おっかさん。すぐ乳をもって行きますよ。
- (11) 吳善華『宮沢賢治の法華文学 彷徨する魂』、東海大学出版会、二〇〇〇・二。
- (12) 続橋達雄「銀河鉄道の夜―幸福を求めて」、『宮沢賢治』第十四号、一九九六・六。
- (13) 鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』、岩波書店、二〇〇一・一二。
- (14) 「初期形二」、『新校本全集』第十卷童話Ⅲ本文篇所収、一二七頁。なお波線部は、引用者による。
- (15) 入沢康夫、天沢退二郎「討議Ⅰ『銀河鉄道の夜』とは何か」、『討議「銀河鉄道の夜』とは何か』所収、青土社、一九七六・六
- (16) 「初期形三」、一三八頁。  
〔初期形三〕、一四一頁。
- (17) 「初期形三」、一七一頁。
- (18) 「ジョパンニの悲哀―少年小説「銀河鉄道の夜」とは何か」、『宮沢賢治』第十七号、二〇〇六・一〇。
- (19) 「初期形三」、一三三頁。  
(20) と同。
- (20) 「初期形三」、一三五頁。  
〔後期形〕、『新校本全集』第十一卷童話Ⅳ本文篇所収、一三二頁。なお波線部は、引用者による。
- (21) 「初期形三」、一六三頁。なお波線部は、引用者による。
- (22) 「初期形三」、一三三頁。
- (23) 「初期形三」、一三三頁。
- (24) 「初期形三」、一六三頁。なお波線部は、引用者による。